

カナダの農民 巨大企業に挑む

日本語ブックレット版 Newsletter 編集シリーズ 038





カナダの農民 巨大企業に挑む

(2010年9月17日)

翻訳：小椋優子

© 2011 デモクラシー・ナウ！ジャパン

カナダの農民パーシー・シュマイザーさんのキャノーラ(ナタネ)畑は、1997年、風で飛ばされてきたモンサント社の遺伝子組み換え種子によって汚染されてしまいました。これによりそれまで50年間かけて品種改良につとめてきた種子がダメになってしまったばかりでなく、この巨大バイオ化学メーカーに、特許権の侵害で

訴えられてしまいました。その後、最高裁判所にいたるまでの7年間の裁判闘争でシュマイザーさんは負け続けます。その間、モンサント社は彼と家族を精神的にまいらせようと、家族の行動を監視し脅迫を続けました。けれども、シュマイザーさん夫妻はめげませんでした。最高裁が出した判決は、形の上ではシュマイザーさん側の敗訴でした。特許遺伝子がどこからどのようにやってきたかとは無関係に、どこにあらうとモンサント社の遺伝子組み換え種子は、同社の財産だということです。だがその一方で最高裁は、シュマイザーさんがこの「モンサント社の「特許権」の「使用」から得た利益はないとして損害賠償を払う必要はないとしました。訴訟の費用も各自がそれぞれの負担とされたことは、実質的にはシュマイザーさん側の勝利といえました。これで一件落着に見えたのですが、この判決から2年後にモンサントの遺伝子組み換え種子が再び、シュマイザーさんの畑を汚染しました。闘いの再開です。シュマイザーさんは近所の人にお金を払って1本1本抜き、経費640ドルの支払いをモンサントに求めました。そしてついに2008年、10億ドル企業モンサントはこの経費の支払いを承諾したのです。パーシーさんがほしかったのは、日本円にして6万円あまりのおカネではありません。モンサントの遺伝子組み換え種子が農家を汚染した場合、賠償責任はモンサントが負うという判例でした。カナダの一農民が自らの権利を守るため、巨大企業モンサントを裁判に引き出しみごとしためたのです。シュマイザーさんは、生命は不可侵だという信念に基づき種子や植物に特許を認めるべきではないという考えです。またこうも言います。「特許は私たちの種子の未来と食糧供給の未来を支配するのがネライです。遺伝子組み換え作物がめざしているのは、飢えている世界に食糧を供給することではなく、農家への種子の供給を管理することです」。世界の食糧供給を企業が支配しようとしている、その事実をぜひとも世界に知らせなければ！パーシーさんの闘いは、世界中で多くの人々の認識を深め、大きな勇気を与えています。(大竹秀子)

・ パーシー・シュマイザー(Percy Schmeiser)

カナダの農民。多国籍バイオ化学メーカー「モンサント社」とのねばり強い法廷闘争を通して独立系農家の権利ならびに遺伝子組み換え作物の規制を訴える国際的なシンボル兼スポークスマンになった。ベルトラム・フェアハーク監督のドキュメンタリー映画『パーシー・シュマイザー モンサントとたたかう』(2009年)で、その活動と人となり浮き彫りにされた。2007年にライト・ライブリフッド賞を受賞

字幕付き動画：<http://democracynow.jp/video/20100917-1>

エイミー・グッドマン：ドイツのボンからの放送です。ライト・ライブリフッド賞^[注1]30周年記念行事が開催されています。1980年に創設されたライト・ライブリフッド賞は、第2のノーベル賞とも呼ばれています。今週ボンには歴代の受賞者80名あまりが集まりました。パーシー・シュマイザーさんはそのひとりで、長年にわたりバイオ企業モンサント社^[注2]に戦いを挑んできたカナダの農民です。パーシーさんと妻のルイズさんは2007年に^[注3]、生物多様性と農民の権利を守る勇気ある行動でライト・ライブリフッド賞を受賞しました。昨日パーシーさんにボンで話を聞きました。まずはベルトラム・フェアハーク監督^[注4]のドキュメンタリー映画『パーシー・シュマイザー モンサントとたたかう』をご覧ください。



ナレーター：多国籍企業モンサントが開発したラウンドアップ^[注5]は世界で最も広範に販売されている除草剤です。ラウンドアップに負けないタイプのキャンノーラ^[注6]も開発しました。ラウンドアップは、すべての植物を枯らしませんが、モンサントの遺伝子組み換えキャンノーラだけは生き残ります。

シュマイザー：このキャンノーラはたいした安全性試験もせずに発売されました。90年代半ばに導入されたとき、各国の政府でさえ企業側の説明を鵜呑みにしました。モンサント・ブランドのキャンノーラを使えば収穫量が増え、農薬の散布量が減り、栄養価が上がるなどと信じたのです。

ナレーター：1996年、巨大化学企業モンサントは除草剤ラウンドアップに対して耐性をもつブランド品種のキャンノーラをカナダで発売しました。シュマイザーさんが住む地域では農家3軒がモンサントの新製品

¹ ライト・ライブリフッド賞は、1980年にスウェーデンの国会議員ヤコブ・フォン・ユクスキュルが創設した国際的な賞で、「第2のノーベル賞」とも呼ばれる。「現代のもっとも切実な問題に対し実際の模範的な解決を提示した者」に与えられ、環境保護、人権問題、持続可能な開発、健康、平和などの分野で活躍する人物や団体が受賞することが多い。デモクラシー・ナウ！のエイミー・グッドマンも、2008年に「真に独立した市民ベースの政治ジャーナリズムによって、主流メディアから排除されがちなオルタナティブな声を何百万もの人々に届ける革新的なモデルを開発した」として、ジャーナリストとしては初めて受賞した。

² モンサント社は、米国に本社を置き、世界屈指の規模と成長力を持つ多国籍バイオ化学メーカー。創業は1901年。ベトナム戦争で使われた枯葉剤の製造メーカーの一つでもあった。遺伝子組み換え種子の世界シェアは90%を占める。

³ 英語原文では、1997年とされているが、実際は2007年。パーシーとルイズのシュマイザー夫妻のライト・ライブリフッド賞受賞理由は、「生物多様性と農民の権利を擁護する勇気、および特許法の現行解釈における環境面および倫理面からみた歪曲に対する挑戦」とされる。

⁴ ベルトラム・フェアハークは、ドキュメンタリーと劇映画をあわせて60本を超える作品を制作・監督している。『パーシー・シュマイザー モンサントとたたかう』のほか、ドイツの核燃料再処理工場を閉鎖に追い込んだ住民反対運動を描いた『核分裂過程』や、遺伝子組み換えやバイオテクノロジーが生態系や社会に与える影響を問い、カナダ、米国、インド、ノルウェーなど世界各地に取材した『暴走する生命』などがある。

⁵ ラウンドアップは、1970年にモンサント社が開発した除草剤で、同社の売上高全体の1割を占める。ラウンドアップに耐性を有する遺伝子組み換え作物ラウンドアップレディ(Roundup Ready)も開発。ダイズ、トウモロコシ、ナタネ、ワタが栽培されている。

⁶ キャンノーラは、食用油の原料として世界中で広く栽培されているセイヨウアブラナの1種。カナダで開発された品種で、その名は「酸含有量が少ないカナダの油(Canada Oil Low Acid)」という言葉に基づいている。品種改良により、従来種のナタネアブラに比べて、過剰摂取により心臓障害を誘引するおそれがあるエルカ酸の含有量がきわめて少なく、甲状腺障害に関与するグルコシノレートの含量も低い。

であるGMOキャノーラ[注7]を栽培することになりました。収穫期に激しい嵐があり、刈りたてのGMOキャノーラがパーシー・シュマイザーの畑に飛ばされて来て50年間かけて改良してきた品種がモンサントの種子に汚染されてしまいました。

シュマイザー:降って湧いたような災難でショックでした。交配したり直接畑で芽を出したりして、ほしくもない品種が私の品種を台無しにしてしまったのです。50年かけて品種改良してきた自家採取の種を失ったのは、胸が悪くなるほど腹立たしく辛い事実でした。

ナレーター:手塩にかけてきた改良品種の汚染と喪失は、パーシー・シュマイザーにとって取り返しのつかない損失でした。ところが、そのうえにモンサントは、被害者であるシュマイザーを犯罪者に仕立てたのです。

グッドマン:ドキュメンタリー映画『パーシー・シュマイザー モンサントとたたかう』からの抜粋でした。

昨日[2010年9月16日]ボンでシュマイザーさんに会い、巨大バイオ技術企業モンサントとの壮大な戦いについて話を聞きました。

シュマイザー:発端は1998年でした。モンサント社は私たち夫婦に対していわゆる特許侵害訴訟なるものを起こし、自社の遺伝子組み換えキャノーラをカナダでは「GMOキャノーラ」と呼ばれていますが、そのキャノーラを私たちが無断で栽培していると主張し告訴しました。GMOの販売が北米で始まったのは1996年でしたから、その2年後のことです。

グッドマン:GMOとは？



シュマイザー:遺伝子組み換え生物です。この場合は、別の生命体から遺伝子を取り出してキャノーラの遺伝子に組み込み、モンサントの除草剤ラウンドアップでも枯れないキャノーラを作り出しました。

グッドマン:キャノーラとは？

シュマイザー:キャノーラは...世界の多くの場所ではアブラナと呼ばれています。油を採るための作物で、調理用の油になります。油をしぼった後のカスは良質の家畜飼料になり、ウシにもブタにも使えます。

グッドマン:GMOキャノーラは、どうやってあなたの畑にはいりこんだのですか？

シュマイザー:隣人が栽培を始めたのが1997年で、翌年にはもううちのキャノーラと交配してしまいました。でも当時私たちは、GMOの種子が風で運ばれたり、出荷時や畑への運搬、畑から穀物貯蔵庫に運

⁷ GMOは、遺伝子組み換え生物のこと。遺伝子組み換え作物の栽培国と作付面積は年々増加しており、2010年現在、全世界の大豆の作付面積の81%、トウモロコシの29%、ワタの64%、キャノーラの23%がGM作物であるといわれる。

ぶときなどに紛れ込んだりしたのが、汚染の主な原因だと思っていました。

グッドマン: モンサントの種を買っても植えてもいないのに、不正使用で訴えられた？

シュマイザー: 畑への混入経路は関係ないとモンサントは主張するのです。実際、彼らは異花受粉や種子の移動など先ほどお話したような可能性を挙げていました。彼らの主張によれば、モンサントの除草剤に対して耐性をもつキャノーラにする遺伝子はモンサントが特許権をもつ商品なのだから、彼らにはキャノーラへの所有権がある。遺伝子がどうやって畑にはいりこんだかは、特許法の上ではどうでもよいことで、モンサントは作物をまるごと農夫から取り上げてもいいし、全部破棄処分させることもできると言うのです。私たち夫婦の場合は、二人で50年以上も品種改良を行い、病害に強いキャノーラを研究してきました。それなのに、裁判所は私の作物に対するモンサントの所有権を認めてしまい、私の研究はすべて失われてしまいました。

グッドマン: モンサントの所有物にされてしまった？

シュマイザー: そうです。

グッドマン: 罰金の金額は？

シュマイザー: 最初は1エーカーにつきいくらかという耕作面積分の罰金を言ってきましたが、結局、別の訴訟を起こして、私たち夫婦に100万ドルを請求しました。それに対しても戦いました。さらにもうひとつ別の訴訟も起こし、これには7年がかりで最高裁まで争いましたが、我々の畑をすべて差し押さえようとした。農地も農機具も差し押さえてあきらめさせようとしたのです。裁判費用を払うために畑を担保にしていたからです。

グッドマン: で、どうなったのですか？カナダの最高裁まで闘った？

シュマイザー: 下級裁判所、控訴裁判所、最高裁まで闘い続けました。下級裁判所では採用されなかった私たちの主張も、最高裁では取り上げられました。まず第一に農民の権利です。自分で育てた種子を撒いて毎年収穫し、改良していく権利です。そして私たちが主張したのは、高等生物—基本的に種子から生じるものすべて—に対する特許は許可すべきではないということです。これが主要な問題でした。私たちは最高裁で、生命は不可侵だと訴えました。誰であれ、どんな企業であれ、けっして生命を支配すべきではありません。

米国も同じだと思いますが、カナダの特許法は、1867年と1869年に制定されており、遺伝子に関する規定はありません。当時は遺伝子など、知られていませんでしたから。ですから今でさえ、遺伝子特許関連の判決は裁判所の判事の判断でしかありません。最高裁での判決は意見が割れ、5対4でモンサントの遺伝子特許権が有効だと認められました。

グッドマン: ということは、裁判所はあなたの主張を支持したのですか、退けたのですか？

シュマイザー: 退けられました。

グッドマン:最高裁の判決で。

シュマイザー:カナダの最高裁で。しかし判決は、生命に関する特許の問題はカナダ議会に戻すべきだとして、種子や植物の特許、そして農民の権利に関する法規を整備するよう命じました。それが現状です。

グッドマン:ということは？

シュマイザー:私たちはモンサントに一切支払う必要はないというのが最高裁の裁定でしたので、実質的には私たちの勝利でした。彼らが起こした100万ドル訴訟も、農地と農機具、住居の差し押さえ訴訟も、私たちに対する懲罰的損害賠償の請求も却下されたので、大勝利でした。

私たちはこれで終わったと思っていました。ところが思いもかけなかったことに2年後の2005年に私たちの畑の一部が再びモンサントのGMOで汚染されたことに気づきました。私たちはモンサントに通知しました。自分たちで検査を行い、モンサントのGMOキャノーラが私たちの農地に再び混入したことが確認できました。驚いたことにモンサントは、確認に来ると言い、2日後にやって来て「たしかにモンサントのキャノーラのGMOがあなたの土地に混入した」と認めました。そして私たちに、どうしてほしいかと尋ねました。その畑でカラシナの試験栽培を始めるところだったので、この50エーカーの畑に生えているGMOキャノーラを1本1本、手で抜いてほしいといいました。彼らはこれに同意しました。

ここからが異常なのですが、実はモンサントが北米全域で農民たちに対して行っている常套手段でした。免責同意書にサインしろというのです。免責同意書には、妻も私も、家族のだれもが、今後はもう死ぬまで、モンサントに対して二度と訴訟を起こすことはできないと書いてあります。そんなものには絶対署名しないと、私たちは突っぱねました。

同意書には、私たちの言論の自由も剥奪されると書かれていました。同意内容を一切、口外してはならないというのです。署名していれば、今朝こうしてあなたにお話することもできなかったことでしょう。言論の自由を放棄するなんて言語道断だといいました。米国とカナダでは大勢の人々が言論の自由のために生命を捧げてきました。それを企業に明け渡すわけにはいきません。

モンサントは「同意書に署名しなければ、問題の植物[モンサントのGMO植物]を除去しない」といいました。私たちは、それなら近所の人たちの助けを借りて汚染植物を自力で除去するモンサントに伝えました。するとモンサントは、ひどく陰険なEメールだかファックスだかを、妻に送りつけてきました。そこには「あなたの畑に生えているGMO植物は、あなたのものではありません。特許法に基づくモンサントの所有物です。好き勝手に処分することは許されません」と書かれていました。我々はモンサントに通知しました。「やりたいように処分します。我々の所有する土地に生えているのですから。我々は税金を払って、この土地を所有しているのです」。そして、自分たちでその植物を除去しました。

グッドマン:モンサントは、除去するなと脅したんですね？

シュマイザー:抜いてはいけない、モンサントの所有物だからと。特許権を盾に、私たちに処分権はないと主張しました。たとえ私たちの土地に生えていてもモンサントの財産だというのです。私たちは、近所の人たちの助けを借りてその作物を除去しました。普通はまずやらないことですが、近所の人に640カナダ・ドルを支払い、請求書をモンサントに送りつけました。モンサントは支払いを拒否し、その後1年間手紙をやりとりした末に、またしても我々が例の書類に署名するなら640ドルと経費20ドルを支払うと言い出

しました。私たちは、再び拒否しました。

忘れもしない2007年、いや2008年の3月19日、裁判の冒頭でモンサントの弁護士が起立して言いました。「裁判長、モンサントは...」—こうなるまでには調停など、あれこれあったわけですが—「640ドルと、20ドルの経費を支払います」。重要なのは640ドルではなく、賠償責任の所在でした。モンサントが遺伝子の特許を所有し、その特許を使った種や作物を環境の中に出しながら管理できないのなら、有機栽培農家や在来農法の農家に与える損害はモンサントの責任です。これが判例になりましたから、大きな勝利でした。遺伝子組み換え作物に汚染された農家は、裁判所に救済を求め、損害賠償や対処を得ることができる。これは世界中に適用されます。10年の法廷闘争が実を結んだと大喜びしています。10億ドル企業のモンサントを640ドルの訴訟で法廷に引き出し、ついにしとめたのです。

グッドマン:カナダの農民でライト・ライブリフッド賞受賞者のパーシー・シュマイザーさんがモンサントとの闘争を語ります。休憩を挟んで彼の話を続けます。

[休憩]

グッドマン:ライト・ライブリフッド賞の30周年記念で歴代の受賞者約80名がボン集まっています。受賞者の一人、パーシー・シュマイザーさんの話を続けますが、その前にドキュメンタリー映画『パーシー・シュマイザー モンサントとたたかう』からのシーンです。モンサントとの対決で受けた脅迫の数々についてシュマイザー夫妻が語っています。

ルイズ・シュマイザー:時折、とても怖い思いをしました。何が起こるか分からないのですから。

パーシー・シュマイザー:電話が鳴り、誰だかわからない相手がこう言うんです。「気をつけろ、やられるぞ」。とても怖かった。私の外出中に、妻の身に何か起きるのではないかと気が気ではありませんでした。



ルイズ:彼らは私たちを監視するのです。家にいる間もずっと監視していて、一日中、自宅でも事務所でも、私たちの一挙一動が監視されました。私たちが土地に何を使っているか、見張っていたのです。自宅にいながらにして囚人にされた気分でした。

シュマイザー:経済的にも精神的にも私たちを参らせようとして、あらゆる手段を使ってきました。血も涙もない会社です。彼らには道義がありません。それが結論です。

グッドマン:ドキュメンタリー映画『パーシー・シュマイザー モンサントとたたかう』からでした。ボンに来て、昨日パーシー・シュマイザーさんのインタビューを行いました。シュマイザー夫妻とモンサント社との現在の関係について聞いてみました

シュマイザー:モンサントとの戦いがこれで終わりになればよいのですが、私がモンサントの特許のことを世界中に知らせようとする限りは...。モンサント社に限らずバイエル社やシンジェンタ社やデュポン社も同

じですが、彼らの特許は私たちの種子の未来と食糧供給の未来を支配することになるのです。GM作物がめざしているのは、世界中の飢えている人々に食糧を供給することではなく、農家への種子の供給を支配することです。世界の食糧供給を企業が支配できるようになるのです。私たちはその事実を世界に知らせようとしています。

グッドマン:シュマイザーさん、いまドイツのボンでお話をうかがっていますが、あなたはドイツ各地を回っていらっしやいますね。ドイツにはなんと、シュマイザー法という法律があるとか？

シュマイザー:ええ、まあ。

グッドマン:ドイツではあなたの体験が大きな注目を集めています。シュマイザー法とは？

シュマイザー:この法律により、ドイツではモンサントのGM作物に汚染された農家は、モンサントから作物を押収すると脅されることも、汚染したことで訴訟を起こされることもありません。

グッドマン:ドイツでは、GM作物はどの程度、大きな問題なのですか？

シュマイザー:大問題です。北米で賠償責任の問題として大きな問題になったからだと思います。どういうことかという、北米ではGM作物栽培農家は遺伝子に関する損害保険にはいれません。話が少し戻りますがモンサントとの最後の裁判で、モンサントは法廷で冒頭に、汚染の責任は誰よりも栽培農家にあると主張しました。なぜならGM品種を栽培すれば、なんらかの形で隣人の作物への汚染は予測できるのだから」と言うのです。この主張が法廷で通らなかったのも、モンサントは汚染の責任は政府にあると言い出しました。規制に照らし販売を許可したのは政府だからと言うのです。この主張も退けられてようやく、モンサントは汚染除去の費用を支払いました。

ですから、世界中で大変大きな問題になりました。遺伝子の特許を持っているからと言って、それを周囲に撒き散らし、生物多様性や有機農業を破壊する権利はないのです。ヨーロッパでは、より大きな問題になっています。ここでは、有機農業が北米よりずっと盛んですから。米国とカナダでも急速に広まっています。

グッドマン:2回目の時、あなたの畑がGM作物に再び汚染されたのではないかと気づいたということですが、どうしてわかったのですか？

シュマイザー:この50エーカーの土地はカラシナ栽培研究用の畑として使っていたのですが、その年は作物を植えませんでした。除草剤を撒いたのに唯一枯れないで残ったキャノーラがありました。その畑では少なくとも10年以上、キャノーラを栽培していなかったのも、どこから来たキャノーラなのか、不思議でした。だから試験してみました。隣人からモンサントの除草剤ラウンドアップを少し借り、10本ほどのキャノーラに印をつけ、ラウンドアップを撒いてみました。12日たってもまったく枯れなかったのも、モンサントの除草剤に含まれるグリフォースートに対する耐性があることがわかりました。以前の裁判でモンサントは、同社の除草剤ラウンドアップをかけても枯れない植物はすべて、モンサントのGM遺伝子を持つ植物だと主張していました。だからすぐにモンサント社の遺伝子だと思い、同社に知らせました。汚染したと思ったら、農家はモンサント社に通知しなければならないと、同社が主張していたからです。裁判で彼らが主張

していた通りにしたのです。

グッドマン:食と農業についてのシュマイザーさんの原則とは？

シュマイザー:まず第一に、人は誰でも、食糧への権利、食糧を生産する権利があるということ。次に、健康的な食糧を生産するために生態系は保護されるべきであるということです。人には安全で栄養豊かな食料を得る権利があり、いかなる国も食糧の輸入を妨げる規制を行うべきではありません。そして誰もが自分たちの食物がどうやって作られたかを知る権利があります。地元の農業は地元が管理し、あらゆる地域が自分たちの農業を規制する権利を持ち、地産地消を奨励すべきです。よくいわれるように、地産地消は特に北米でよくみられるようにはるばる遠くまで運搬しないので燃料や労力を節約することができます。種子は皆の共有財産であり共有資源です。種子の未来を決める権利を誰も独占してはならないと思うのです。生命体に特許を与えるべきではありません。ターミネーター種子[注⁸]は世界的に禁止すべきです。ターミネーター種子は、断じて導入してはなりません。地上にこれまで存在してきた中で最大の、生命に対する攻撃です。種子の発芽をとめて、その種子の未来を奪ってしまう遺伝子を使って、世界中の種子の供給を完全に手中に収めようとする者ができたのですから。



グッドマン:ターミネーター種子とは？

シュマイザー:ターミネーター遺伝子は、簡単に言うと、これを組み込まれた種子は発芽して成長しても、その作物からとれる種子はまったく芽を出しません。ですから、翌年の栽培用の種子として、繰り返し使うことはできません。もっと危険なのは、ターミネーター遺伝子と交配すると、在来作物の種子も発芽しなくなってしまうことです。生命の未来を閉ざすのです。

グッドマン:農家は種子を保存できず、毎年種子を買わなくてはならなくなるのですね。

シュマイザー:その通り。だからこそ、地球に対する史上最大の攻撃なんです。生命がとどえるのです。農家も園芸業者も毎年種子を買わざるを得なくなるのです。

もうひとつ、農民たちが種子を交換する自由も守られるべきです。なぜかという種子業界でよく言うように、万能な種子はないからです。私たち夫婦は、地域の気候や土壌に合った種子や作物を開発してきました。でも、もしも私たちが、モンタナとか、隣の州とか、200マイルも離れた場所とかに移住していたとすれば、気候風土は異なりますし、土壌も違ったでしょう。だから農家は、自分の土地に適した品種を開発する権利をもつべきなのです。自分たちの作物の生物多様性を守るために、この権利を奪ってはなりません。農民には自分の土地に対する権利があり、遺伝子組み換え作物の汚染を被らない権利があります。

⁸ ターミネーター種子とは、米農務省と種苗会社「デルタ&バイナランド」社が開発した遺伝子組み換え技術で作られた種子で、1度は発芽・生長するが、できた種をまいても、発芽時に種子を壊すタンパク質が働いて芽が出ず、1代限りで生命が終焉する。モンサント社はデルタ社を買収して、この技術も手中にしたが、遺伝子組み換え容認派からさえ、この技術の倫理性に疑問が投げかけられたために、商品化はなされていない。

グッドマン: シュマイザーさんの原則はどのくらい浸透していますか？ 世界中で、独立農家は優勢ですか、劣勢ですか？というか、モンサント社の勢力は拡大していますか、それとも縮小していますか？

シュマイザー: そのご質問に答えようとして頭に浮かぶのが、1996年に導入された4つのGM作物です。とうもろこし、大豆、綿花、ナタネ。ナタネは特にカナダのキャノーラです。これらのGM作物を自然界から回収して元の環境に返せるかどうか、科学者にもその方法がわからないそうです。我々はこの問題を解決できたでしょうか？ 私は「イエス」といいたい。なぜならモンサントがGM小麦やGM米、GMアルファルファを発売しようとしたとき、米国とカナダの両国で遺伝子組み換え作物をこれ以上導入することに対する大きな反対の声があがりました。4つの作物が引き起こした被害を目にしていたからです。だからとても重要です。私たちが今やっていることは今後何世代にもわたり世界の種子と食糧の管理に影響を及ぼしますから。

グッドマン: 最後になりますが、あなたは今世界じゅうを旅していますが、67年から71年まではサスカチュワン州[注⁹]議会の議員を務めました。サスカチュワン州にあるあなた自身の故郷ブルーノの市長にもなりましたね。そのころもずいぶん旅はしていたんですか？ そしてモンサントとの一連の訴訟を終えた今、世界中でどれほど多くの言葉を、種子のように撒いているんでしょう？

パーシー・シュマイザー: 招待をすべて受ければ1年中旅行していることになるでしょう。でもひとつ例を挙げると、この情報を伝えて人々に気づいてもらおうと、去年はサスカチュワン州を10カ月の間離れて、南極以外のすべての大陸をまわりました。この年になって—もう定年退職してもいい年ですが—引退などとてもできないと感じています。私たちがこのことにこだわるもうひとつの理由は、すでに述べたように、未来の世代のためです。私たち夫婦には15人の孫と3人のひ孫がいます。だから私たちはどんな未来を彼らに残せるかを考えます。私たちがとても心配しているのは、大学での研究調査資金のどれほど多くが、企業からの助成金でまかなわれているかということです。これには本当に恐怖を感じます。例えばランド・グラント・カレッジ[注¹⁰]に企業が資金を出せば、どれほど大きな支配力をその企業が大学にふるうことになるかは歴然としていますから。そんな中から、どんな未来が生まれるのでしょうか？ 私たち夫婦には今現在、大学生の孫が6人います。学問の自由が侵されたら孫たちにはどんな未来が待っているのでしょうか？ 私たちはそんな未来を見たくはありません。科学者には、自由に調査研究をしたり、発見したことを発表する自由が与えられなければなりません。

グッドマン: モンサントからはその後も何かされましたか？

シュマイザー: 何度も脅されました。

グッドマン: どうやって？

シュマイザー: 一例を挙げましょう。妻と私は南アフリカのケープタウンの議会で話しをしていました。議会から出ると、ヨハネスブルクから来たモンサント社の現地駐在員のひとりが私たちの前に駆け寄って立ち

⁹ サスカチュワン州はカナダの中西部に位置する州で、州の経済は主に農業によって支えられている。

¹⁰ ランド・グラント・カレッジとは、米国で農業および機械技術に関する学科を教授内容にすることを条件に公有地を無償で供与されて設立された大学。多くは1万人以上の学生を擁する巨大施設である。

はだかりました。そしてすっかり興奮した調子で、私と妻に向かって顔面にこぶしを突き上げながら言いました。「モンサントには誰も逆らえない。あんたたち2人とも、いつか必ず痛い目にあわせてやる」。妻が電話に出ると「気をつけな。このままですむと思うなよ」彼らはうちのドライブウェイまでやってきて、妻の一挙一動を一日じゅう監視するのです。私たちを脅し、怖がらせようと、畑沿いの道に車を停めて中に待機し、一日中私たちを観察していました。

グッドマン:それでも屈服せずやり続けたのは?

シュマイザー:世界中の農民の権利を守るために立ち上がらなければと感じているからだと思います。私は人生のすべてを農業に費やし、農業の政策と法律のために働いてきました。農民たちは決して自分たちの種や作物への権利を失ってはなりません。そんなことをすれば、私たちの祖先や祖父たちが逃れて来た、ずっと昔のヨーロッパの農奴制や封建制に戻ってしまいます。100年経つか経たないかのうちに、私たちの進む道はぐるっと一回りして、今度は王や領主ではなく企業の支配に下っているのです。

グッドマン:パーシー・シュマイザーさん、どうもありがとうございました

シュマイザー:こちらこそありがとう。あなたと美しい陽射しの朝を共に過ごせたことを喜んでいます。

グッドマン:ライト・ライブリフッド賞受賞者であるカナダの農民、パーシー・シュマイザーさんでした。

翻訳協力: 桜井まり子 (字幕校正)

編集協力: 中野真紀子

編集: 大竹秀子

制作: デモクラシー・ナウ! ジャパン

©2013デモクラシー・ナウ! ジャパン

お問い合わせ office@democracynow.jp

ニュースレター購読のお申し込みはこちらへ: <http://democracynow.jp/newsletter>